

# 努力家と天才の茨道 ～ Season2

椿姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

氷川紗夜への告白が成功し、正式に交際を始めることになった華宮和都（はなみやわと）。

彼は華宮家の一人息子でありお金持ち、幼少期からの英才教育によりなんでも出来る言わば完璧人間。そして、ガールズバンドRoseliaの湊友希那、今井リサと幼馴染である。

幼馴染に振り回されたり、紗夜とイチャついたりRoseliaメンバーや他のみんなも巻き込んで今日も今日とて和都の周りはドツタンボタン大騒ぎ！そんな中でも成長して行く物語です。

※前作「努力家と天才の茨道」歌姫を添えて」の続編となっています。

# 目次

E p i s o d e 0 1	新たな始まり	
1		
E p i s o d e 0 2	恋愛相談	11
E p i s o d e 0 3	氷川紗夜、初めて	
のクッキー作り		20
E p i s o d e 0 4	プロデューサー・	
チュチュ		33
E p i s o d e 0 5	にやんにやんな休	
日		43
E p i s o d e 0 6	BRAVEJEW	
ELとdubとチュチュ		55

# Episode 01 新たな始まり

（華宮邸）

「……よし。行ってくる」

「いってらっしやいませ、坊っちゃんま」

通っている羽丘の制服に着替えて爺や使用人の人達に見送られながら家の門を出る。いつもならこのまま真つ直ぐ学校に向かうが今日からはいつもじゃない。俺は鼻歌混じりに待ち合わせ場所に向かっていく。

「ちよつと早く来すぎたかな…」

短く切った髪を触りながら身だしなみを確認する。前までは長くしてた髪をポニテにしたりしてたけど思い切つて短髪にした訳だが…

「…変じゃねえよな？」

「和都」

髪を気にしていると不意に声を掛けられる。振り向くとそこに居たのは羽丘とは違う花咲川の制服を身に纏い、長く綺麗な青緑の髪を靡かせている女子高生いや、女性と言

うべきだ。そしてこの度交際をする事になった俺の彼女でもある。

「遅くなつてすみません。約束の時間は過ぎてないかしら？」

「ん？ だいじよぶ俺も今来たところだから」

「それなら良かったです」

「じゃあ、行こうぜ？ 紗夜」

俺はそう言つて紗夜の前に手を差し伸べる。

「…和都？」

「いや、その…手、繋いでみようか？ 紗夜が前言ったからそれを実行しようとしてるだけで…」

目を逸らし照れながらも紗夜にそう言うのと紗夜は恥ずかしがりながら俺の手を取る。

「じ、自分で言つておきながら言うのもなんだけど恥ずかしい…」

「なんで紗夜が俺より照れるんだよ…手差し伸べてた俺の方が恥ずかしいってーの」

紗夜の綺麗な手を優しく握る。こ、これが女子の手…すっげー柔らかい。

「わ、和都…さつきから私の手をじつと見てるのだけど…」

「へえっ!?! いやっ…紗夜の手が綺麗だったからつい…」

「す、少しは私の顔も見たいです…です。そうじゃないと和都が手フエチにみえるの  
で」

「ぶふっ!?!」

紗夜の唐突の発言に思わず吹き出す。

「はっ!?!お、俺が手フエチだと!?!誰がそんなこと言ってた!?!」

「ちよつと声大きいです…」

「わ、悪い…」

声のポリウムを落とし、改めて紗夜に話し掛ける。

「なんで俺が手フエチってことになってる?」

「今井さんが言っていました。『練習してる時とか手伝いを頼んだ時ってよく手を見られたりするんだよねー♪もしかしたら手フエチかも♪』って」

「リサあの野郎…余計な事吹き込みやがって…」

「それで、和都は手フエチなんですか?」

本題に入ってきた紗夜に俺はハッキリ断言する。

「俺は手フエチじゃねえよ…見蕩れてただけだつて」

「見蕩れ…そ、そう言ってくれると嬉しいです」

つたくりリサ、幾ら幼馴染でも言つていい事悪いことぐらいわかってるだろうが。まあそれは友希那にも言えた事なんだが猫が絡むと友希那は喋り方が軟化してポンコツになるからなんとも言えん。

…おっと、初めての読者諸君にわかりやすく説明すると俺と友希那とリサは1歳違いの幼馴染だ、同じ羽丘学園に通っていてガールズバンド「Roselia」を結成してる。紗夜も属して担当はギター。友希那はボーカル、リサはベースだ。他にも、紗夜と同じ花咲川に通っている燐子さんはキーボードを、ドラムは燐子さんと仲がいいメンバー。最新少中学3年のあこ。

誰も彼もがトップクラスの腕を兼ね備えていてRoseliaでしか奏でられない最高の音楽を求めていく。俺は半ば強引に連れられて（主に友希那）だがRoseliaの練習を見てアドバイスをしたり、俺の楽器を使って演奏してイメトレさせられたりとする事は様々。別に嫌だつてわけじゃないしこれで紗夜や友希那達が成長できるならまあ、それでいいって思ってる。

そして俺はそのRoseliaメンバーの紗夜へ告白し、正式に交際をすることになったのだ。友希那達からは、「おめでとう」とか感謝の言葉を貰えて凄く嬉しかった。めっちゃ恥ずかしかつたけども。紗夜と二人で歩いていくうちに分かれ道に辿り着いた。

「あ……私はこっちなので」

「え？あ、そうだな……」

紗夜も俺も名残惜しそうに握っていた手を離す。ここから登校先は別々になってい



るから仕方がないと言えば仕方ないがやはりお互いにまだ手の感触を感じていたかった。

「では…また後で」

「お、おう…」

そう言って紗夜は花咲川の方へ歩いていった。歩いていく紗夜の後ろ姿を見てから俺も羽丘の方に向けて歩きを進めた。

「……まだ、紗夜の手の感触残ってる…」

初めて待ち合わせをして途中まで登校してみたわけだが…正直めっちゃ恥ずかしかった。だって紗夜めっちゃ指絡めてきてんだぞ!?!おお、落ち着け俺!

「ふう…ふう…落ち着いッ」

「ワ〜トっ!何そんなに朝から息切らしてんの〜♪」

「おうわっ!?!」

言葉を遮るように俺の背中が勢いよく押される。こんなふうには朝からちよつかいを掛けてくる人は幼馴染以外にいない、と言うかそういう事するのは1人だけと決まっている。

「痛てて…朝っぱらからいきなり何すんだよりサ!」

「おっはよくワト☆朝から紗夜とらぶらぶだつたね〜♪いいねいい青春してるねえ



ちよつかいを出してきたのは幼馴染の今井リサだ。同じ羽丘に通っていて上記で説明した通り、Roseliaのベース担当。見た目がギャルっぽいのが実はめちやくちや面倒みが良くて菓子作りにも長けている。クラスの男子曰く『リサさんはコミュ力のガチ勢』との事。

「…リサ、私眠いからあまり大きな声で話さないで欲しいのだけど…」

「ごめん友希那くまた新しい曲作り？」

「ええ、そうよ」

欠伸をしながらリサに注意をしているのがもう1人の幼馴染。湊友希那、Roseliaのリーダーだ。

「まーた新曲に手こずってたのかお前は？」

「ええ…お陰様で眠すぎるわ」

「あんま無茶しねー方がいいんじゃない？」

「ライブが迫ってるからそうとも言えないのよ」

友希那はそう言いながら眠たそうな目を開けようとしている。

「友希那、せっかくワトが心配してくれてるんだからさく♪素直になった方がいいんじゃない？学校終わったらカフェ行こ、ね？」

「で、でも曲とバンドの練習も…」

友希那はリサからのカフェの誘いに少し戸惑う。

「たまにはいいんじゃないやね？少しくらいリラククスしとけや。身体ぶつ壊すしてからじゃ遅いんだからよ」

「和都とリサがそう言うなら…」

友希那は渋々ながらもリサとのカフェを承諾する。

「友希那とカフェ楽しみだな〜♪それはそれとして…ふふふ、ワト〜♪」

「な、なんだよ…」

「さつき紗夜と手繋いで歩いてたでしょ〜♪」

「ぶふおあっ!!」

リサの爆弾発言に思わず俺は吹き出す。見られていたのが恥ずかしい。と、言うか…  
「いつから見てたんだよっ!!」

「紗夜と待ち合わせしてた時から後ろにいたよ〜友希那も一緒にね☆」

「はああっ!!リサお前ナズエミデルンデイス!!」

「だいぶ見られていたと思うと恥ずかしくなり舌を噛んだ。めっちゃ痛い。」

「わ、ワト大丈夫…?今めっちゃ舌噛まなかった?」

「し、舌超痛てえ…」

苦痛に耐えながらも俺は学校へと向かった。

紗夜 side

(和都の手の感触がまだある…あたたかい)

先程まで手を繋いでいた自分の手をきゅつと握りしめる。

(初めて待ち合わせを試してみたけれど…これが恋人同士って事なのね…)

思わず私は和都に告白された日のことを思い出す。まさか両思いでしかも本当に付き合うことになるとは思ってもなかった。しかも帰り際に私からキスマでしてしまっなんて…しかも帰ってから日菜に和都と交際することを話したら喜びなのか悲しいのかよく分からない感じになってたわ。あんな日菜を見たのは初めてかもね…

(今思い出すと私がした事って…ず、随分と大胆だったような気がしますね／／／／／)  
誰かを好きになるなんて当時の私には無いと思っていたけど何が起きるか分からないわね。異性と付き合うことに関してまだ知らない事が多いけど和都となら…とても充実したひと時を過ごせる、そんなことを思いながら私は学校に向かつていった。

学校に着いてからは自分のクラスに行き、ギターや道具を置いて風紀員の仕事に向かう。今日は整容点検があるから和都に頼んで待ち合わせ時間を僅かに早めてもらった。

初めての待ち合わせがこんな感じでもいいのかと私は言ったけど和都は

『俺は全然構わねえよ。どういう形であれ紗夜と一緒に入れるならな』

って言うってくれたので安心しました。点検を終えてからは自分のクラスに戻りホームルームを終えて授業に取り組む。もう時期試験もあるので気を引き締め無ければいけないし、同時期にSPACEでの新曲披露LIVEも迫ってきている。

(和都の事で浮かれすぎるわけにもいかないし勉強もバンドも両立できるようにしつかりしなきゃ……)

委員会の仕事や日直用ノートを先生に提出したりするとあつという間に放課後になった。練習の為にギターを背負って教室を出て行こうとすると白金さんに呼び止められる。

「ひ、氷川さん……」

「白金さん、どうしました?」

「その…友希那さんからなんですけど『今日の練習は休みだから各自での練習を』だそうです」

「そうですか。わざわざありがとうございます」

私は白金さんのお礼を言っただけで教室を出て行く。練習が無くなりそのまま家に帰って今日はギターの練習をしようかと思いいながら帰路を歩いていたらその時、和都からLIN

●が届く。内容は『恋人同士になって初めてのデートはどこにする?』と、いうものだった。唐突の話題に足を止めて私は赤面してしまう。

「は、初デート……」

どこがいいか?と聞かれてもそういう事を殆ど知らないからなんて言ったらいいかわからない私は『ちよつと待ってください』と一言返信して家に入った。そのまま階段を駆け上がり自分の部屋に入るや否、ギターを置いてベッドにダイブする。

(デートとかを体験したことのある人に相談するのが一番ですよね?…だったら思い当たるのは……)

私はある人に相談にのってもらうために電話を掛けた。

「あ、もしもし…:はい。氷川紗夜です、ちよつと相談したいことがあるんですけど…:今時間空いてますか?」

## Episode 02 恋愛相談

紗夜 side

私は電話である人とファミレスで待ち合わせている。

「そろそろ来る頃かしらね…」

そう言いながら注文していたフライドポテトに手を伸ばし口に含む。不躰にお願いしてしまい迷惑ではないだろうかと思いつつこと数分…

「えっと…紗夜さん」

不意に声を掛けられた振り向くとそこには約束していた人が立っていた。一般男子よりも少しだけ長い青髪に翡翠色の目、後ろ髪は長いから一本に束ねて横に降ろしている。顔だけ見れば女の子に間違えられかねないが彼は実質男だ。

「いきなり呼び出してしまつてすみません、滝河さん」

「いやあ…紗夜さんに『相談したいことがあります』って言われるのは珍しかったので。と言うよりも今日はひまりもバイトで忙しいと言うので実質時間も空いてましたから問題ありませんよ」

滝河さんはそう言うって私の前に座り荷物を置いた。この人は誰だと分からない読者のために説明させていただきます。

滝河さんこと滝河雄天さんは日菜の通っている羽丘学園の2年生でガールズロックバンドAfterglowのメンバーと幼馴染であり、そのメンバーの上原ひまりさんとお付き合いしてる人です。

「えつと紗夜さん、僕が呼ばれた理由はLINEで見ましたけど…和都との恋人になつてからの初デートの内容について相談したいことがありますって…」

「あ、はい…」

私は自分なりに考えた和都とのデートプランを滝河さんに説明する。

「…と、言う事なんですけども。ど、どうでしょうか?」

「まあ今のを聞いて紗夜さんが大体どう言ったことを和都としたいかってのは分かりましたよ」

そう言うって滝河さんはノートに私から聞いた話やデートプランを纏めている。

「流石滝河さんですね。上原さんと出かける際にもそんな風に考えてたりノートを使ったりしてるんですか?」

私はふと思った事を滝河さんに投げかけてみた。すると意外な答えが帰ってきた。

「え?僕がひまりと出掛ける時にこんなことするのか、ですか?いやいや、そんな事しま



せんよ?」

「そ、そうなんですか?」

意外な答えで私はびっくりしてしまう。てっきり予定とかを組み立てているのかと思つてましたけど…違うんですかね?

「デートとかする時は確かに予定を立てたりするのはすごく大事なことですし紗夜さんの意見や考えは的を射抜いています。でも、予定外の事とかまで考えてたらいくらなんでもキリないですよ?」

「で、でもそういうのつて大事なのでは…?」

「まあ、そうですねけども…僕とひまりの場合が特別なのかもつて感じはしますね…」

滝河さんは頬をぼりぼりと掻きながらため息をつく。

「ひまりと出掛ける時なんですけど、最初はどこ行くか決めてそつからはひまりが行きたいつて言つてたところについてそれからは何も無いですよ」

「滝河さんの、上原さんにデートとかの事は任せつきりでいいんですか?」

「…任せつきりつて言うよりも、ひまりが幸せそうならそれでいいんです。笑つてるひまりを見るのが好きなんですよ、僕」

「そう…ですか」

そう言う滝河さんはどこか幸せそうな顔をしてました。それから色々アドバイス等

をしてもらい支払いを終えて店を出る。

「今日はわざわざありがとうございます。どうぞいただきます滝河さん。私なりに考えてみたいと思います。では…」

「つあー！すみません紗夜さん」

「どうしました？」

帰ろうとする滝河さんに呼び止められる。

「もしよかつたら、これを…」

そう言つて滝河さんが差し出したのは商店街に貼つてあるようなチラシだった。そのチラシには『羽沢珈琲店主催♪お菓子作り教室♪』と描かれていた。

「お菓子作り教室…?」

「はい。今度の土曜日につぐみの家でお菓子作り教室を開くつて事になつてそれでチラシ配つたりするのを手伝つたりしてゐるんです。初心者経験者問わず歓迎ですし調理道具はつぐみの家から全部レンタルする形になるので持つてくるとするのならエプロンとかですかね…一応僕もアシスタントとして参加するので。まあ考えておいてくれると嬉しいです。じゃあ僕はこれで失礼します」

滝河さんはそう言うと言つて自転車を勢いよく漕いでそのまま帰つて行つた。私は滝河さんが見えなくなつてから歩きを進めてSPACEへ向かい、湊さん達と落ち合い練習を

開始した。和都は演劇部に顔を出しに行くから今日は Roselia の練習を見に行けない、と事前に連絡をもらってる。

「ふう…紗夜、今日は調子いいみたいね。何かあったのかしら？」

「へっ？いえ、そんな事は…ありませんよ」

「大方、和都の事かしら？」

「ぶふっ!？」

湊さんの発言に、私は柄にもなく吹き出しそうになってしまった。珍しい生き物を見たけたかのように宇田川さんと今井さんが私を見てニヤニヤしていた。

「う、宇田川さんっ！今井さん！なんでニヤニヤしてるんですかっ!？」

「いやあく、紗夜ってワトの事になるとほんっといつものクールさが無くなるなって思ってた☆ね、あこ？」

「うんっ！でも華宮先輩の事をそのぐらい好きだっことですよね紗夜さん？」

「う、うぐぐ／／／／／」

「あく♪紗夜が照れてる♪」

「て、照れてなんかいいですっ!!くう……」

恥ずかしい…けど調子が良いということとは否定はしない。最近和都の事を考えたり一緒にいたりすると胸のドキドキが止まらないというか…まだ、よく分からないこと

ばっかりですね。

一通り曲の通しを終えて休憩に入ると今井さんがクッキーの入った小包みをみんなに渡していた。

「みんなちよつと休憩しよ〜」

「ありがと、リサ」

「いつもありがとリサ姉〜！」

「はい、燐子と紗夜も」

「今井さん…ありがとございます」

「ありがとございます」

クッキーを渡されてさっきの滝河さんの言葉を思い出す。

『土曜日につぐみの家でお菓子作り教室を開くつて事になってそれでチラシ配つたりするのを手伝つたりしてゐるんです』

「…………お菓子作り教室、ですか」

「ん〜？紗夜どうしたの？」

「い、いえ。先程滝河さんと話していた時にちよつと色々あつて」

「滝河さん、つてことは雄天か！へえ〜、紗夜と雄天つてなんか意外な組み合わせだね？」

「あんまり接点無いと思つてたよアタシ」

そんなことを話しながら休憩を終えて私達はまた演奏を始める。5分休憩を挟みながら演奏する内にスタジオを借りている規定の時間までできていた。

「ふう…今日はここまでね。明日の練習はオフだからって練習は怠らないでね」

「ふっへえ…お疲れ様でしたあ…りんりん！一緒に帰ろ〜！」

「あ、ま、待つて…あこちゃん、早いよ…」

宇田川さんは白金さんを連れて勢いよくスタジオを出て行く。続いて私と湊さん、今井さんが鍵を閉めたのを確認してスタジオを出た。湊さんと今井さんと分かれた後、私は真つ直ぐ家に向かって帰路を歩いていく。

（お菓子作り教室のこともあるけれど和都との初デートのこともあるし…）

そう思っているとスマホが鳴るので取り出すと和都からだった。何かと思い電話に出る。

「もしもし、和都?」

『紗夜か?今日の朝さ、初デートのこと話したじゃん?』

「っ?!え、ええ／／／／／」

『実は…明日土曜日だからどこか行こうかって思ってたんだけど…バ薰の野郎が…』

「…瀬田さんの事ですか?」

『んああ…ちつと部活で強制参加型のイベントあるって事今言われて…スマン!』

「な、成程…だいたい分かりました」

『ほんつとに悪い！あのバカあとでシめる！』

そう言つて和都は電話を切った。

「……………和都は和都で大変ね…」

都合が入つてしまったとはいえ明日暇になつてしまった私。部屋でのギターの練習も考えたが、お菓子作り教室のチラシをもらつていたことを思い出した。

「……………エプロン、どこにしまつてあるかしら？」

薫side

く演劇部 部屋く

「薫、どうして別の学校の私が羽丘の行事に、しかも勝手に参加させられることになつて  
るのかしら？」

「なあ…バ薫、なんで明日あるイベントを今日言つたんだ？サプライズとかそういうの  
はいいからよお…？な？」

「ちーちゃ…千聖、和都。悪かつたから…荒縄を解いてくれないか？2人とも、顔が怖い

よ?美形が台無し」

『あああん!』

鬼のような形相に私は思わず萎縮する。

「ひっ…まつ、麻弥っ!!た、助けてくれっ!」

「薫さん…今回ばかりはジブン、助け舟出されてもフオローできませんよ…」

麻弥に助けを求めるも、苦笑いで返される。

「……………は、夢にやい」

「薫、どうやら貴女にはお説教が必要みたいね?」

「バ薫…いくらなんでも俺だって我慢出来ないことあるの知ってるよなあ…?」

「……………」

『いっ』

「……………ごめんなさあああいいっ!!!」

この後、私は千聖と和都に1時間ひたすら謝り倒した。

## E p i s o d e 0 3 氷川紗夜、初めてのクッキー作り

紗夜 side

氷川家 紗夜の部屋

「おねえちやあく〜んっ！リサちーから聞いたよ！今日はRoseliaの練習ないんでしょ!? すっごく晴れてるし〜♪ っつてなるからあたしと一緒にどこか遊び行こーよー！ ねーえー！」

「んぐぐ…離しなさい日菜！」

羽沢さんの家へ向かおうとする私の足に日菜がしがみつき必死に引き留めようとする。が、私はなんとかして部屋を出ようとする。

「今日は羽沢さん家に行かなきゃ行けないっつて前から言っていたじゃない」

「えー！じゃああたしも連れてっつてー！」

「ダメよ！それよりも日菜、パスパレは練習無いの？」

「千聖ちゃんがドラマの撮影だし彩ちゃんはバイト、麻弥ちゃんはクイズ番組の特番だ



し、あたしは次のライブまで練習しなくてももう覚えたからいいかなーって」

笑いながら日菜はそう言うけどこの子のそういうことを平気で言ってるのが直らないのかしら…まあ、直る見込みも余地も無いに等しいのだけど。

「またあなたはそんな…」

私は日菜の手を振りほどく。

「とにかく！私は忙しいのよ、遊びに行くなら他の誰かを誘って行きなさい！」

私はそう言っつて部屋を出ていき、羽沢さんの家へ向かった。

日菜 side

「ぶーぶー…残念だあ…しよんぼりだあ…」

あたしは自分の部屋に戻ってベッドにダイブする。

「前みたいに突き放したり厳しくなってるのからいいけど…あたしにもかまって欲しいのー！」

枕を抱きしめてゴロゴロとベッドを転がり回る。和都くとデートしてイチャイチャしたりするのが多くなつて来てるのが羨ましい…あんな風には笑ったり表情を変えらるおねーちゃんを間近で見れるの羨ましー！和都くんずるーい！

「…まあこうしてても仕方ないし、彩ちゃんのバイト先に遊びに行こーつと！」  
あたしはベッドから起き上がってカバンを持って部屋を出て行った。

紗夜 side

「後ろから日菜が着いてきて…ないわね」

時折後ろを振り返りながら羽沢珈琲店の前まで来た私は日菜がストーキングして来てないかを確認する。RoseliaのLIVEの時に変装までして来るくらいだから警戒はしていたけど…

「まあ、大丈夫よね…日菜は何度言っても分からない子じゃないのは分かってるし」

私はほっと胸をなで下ろし、羽沢さんと滝川さんが待つ店の中へ入る。

「紗夜さん！おはようございます！」

「あ、紗夜さん来てくれたんですね」

そこにはせつせと準備をする羽沢さんと滝川さん以外にも今日のお菓子作り教室の参加者が沢山いた。こんなにいるなんて思わなかったわ…

「今日はよろしくお願ひします」

「そ、そんなに畏まらなくても大丈夫ですよ。ね、雄天くん？」

「そうですよ紗夜さん」

滝川さんは眼鏡を掛けて髪をヘアピンで留める。

「折角参加してくれたんですから気難しく行かずに楽しくやりましょう。それに…」

滝川さんは私にしか聞こえないような声で囁く。

「クッキー、和都の為に覚えたいんじゃないんですか？」

「っ!?!／／／／／」

私は滝川さんの言葉に思わず後退りする。私は息を整え滝川さんに詰め寄り小声で問いかける。

「和都から聞いたんですかっ!?!」

「いや聞いてませんよ…それ以前に2人が付き合ってることを和都と同じクラスの僕が知らないとしても思ってる方が逆にすごいと思いますけどね…」

「う、うう…」

「大丈夫ですよ、その辺ちゃんとサポートしますから。ね?」

「……それを破ったら1ヶ月和都と私にポテト奢りですからね」

「わ、わかりました…」

滝川さんが約束を破るような人ではないことは日菜から聞いてますし分かっているけど一応保険をかけておかなければ。…そろそろ話を戻しましょう。

「羽沢さん、今回のお菓子作りにアイシングクッキーとありましたけどどのようなんです？」

「えっと、アイシングって言うのは普通のクッキーに砂糖や卵白を使って着色したりデコレーションすることです！ですからやることは、普通のクッキーを焼いて、デコレーションするだけなので難しくありませんよ」

「上手くできればいいのだけけど…」

「そんなに心配しないで平気ですっ！」

私が不安になっていると羽沢さんが励ましてくれた。

「テーブルの上に置いてある薄力粉とバター、あとは砂糖をこねてクッキーの生地を作るだけです。詳しくはこれから私や雄天くん、お母さんから説明しますのでもし分からないことがあったらなんでも聞いてくださいね！」

「は、はい。ありがとうございます」

「つぐみー、ちよつといいかしらー？」

「どうしたのとお母さん？あ、紗夜さんすいませんすぐ戻りますから」

羽沢さんはそのまま店の厨房に入ってしまった。

（そう言えば和都は今頃瀬田さんや白鷺さん達と劇のイベントだったわよね？和都の話だと今日行く事を昨日伝えられたとか…大丈夫かしら？）

ちよつとした不安も過つたが和都なら大丈夫だろうと思ひながらもお菓子作り教室が始まつた。

日菜 side

くファーストフード店く

「そんなわけでおねーちゃんについて来ちゃだめーって言われちゃつたの！彩ちゃんどう思うー？」

「ひ、日菜ちゃん…今バイト中なんだけど…」

「どう誘つたらよかつたかなー？」

「お願いだから注文してっ!？」

あたしはポテトとホットコーヒーを頼んでテラス席の空いてる席に座る。

「はあ、おねーちゃんと来たかつたなあ…もぐもぐ…美味ひい」

数十分でポテトを食べ終えコーヒーを飲みながら雲ひとつない青空を見る。

「こーんなにいい天気なのにおねーちゃんといれないなんてな」

「あれー？ヒナ？もしかしてー人？」

「一人で呟いてると買い物帰りなのか手荷物が多いリサちーがあたしの所にやってくる。」

「あー！リサちーっ！ねえ聞いてよおねーちゃんがさあ…」

あたしはリサちーに朝あつたことを話す。

「つてことがあつたのー！」

「へえ、紗夜がつぐみの家のお菓子作り教室にねえ…」

「最近突き放されることはなくなったのはいいんだけど構って欲しくて…それでリサちーに相談なんだけどさ」

「ん？アタシに相談？いいよ☆ドーンときなさい」

「ホントにっ!?!じゃあ…おねーちゃんに夜這いして一緒に朝迎えたいんだけど」

「ヒナ、一回深呼吸しよっか☆」

紗夜 side

(あれ？今なんか寒気が…気の所為かしら)

クッキー生地を作る最中、何かを感じた私は生地を混ぜていたヘラを置く。

(またどこかで日菜が私の事を話してるのかしらか…まあいいわ。今はそれよりもこつ

ちね……)

私が見つめるその先……ヘラで混ぜていたボウルの中には薄力粉と溶かしたバター、砂糖を混ぜた物がある。

(どのくらい混ぜればクッキー生地が出来るのかしら？分量は事前に羽沢さん達が測ってくれたから大丈夫だとは言っていたけど……もしどこかで間違えてたかと思うと……ん……)

「紗夜さん？どうしたんですか？さつきから唸ってますけど……」

悩んでいると羽沢さんが後ろから声をかけてくる。思わず私は驚いて飛び上がりそうになってしまった。

「羽沢さんっ!?!い、いえその……今生地を混ぜていたんですけど……どのくらい混ぜればいいか分からなくて……」

「そうだったんですね！ちよつと見せてもらえますか？」

羽沢さんは私が混ぜていたボウルを手取る。

「……もう少しでいい感じになりますよ！」

「も、もう少し？具体的には……」

「具体的にはって言われても……普通のクッキーと同じって言うか……とにかく材料が纏まるようにしっかりと混ぜればいいと思います！」

「と、とりあえずやってみます。ありがとうございます」

私は言われた通りに材料が纏まるようにヘラで生地を混ぜる。混ぜていくこと数分…生地が固まってきてそれらしい色にもなっていた。

「こんな感じでしょうか？」

「いい感じですよ紗夜さん！」

羽沢さんは私に付き添いでクッキー作りを教えてくださいている。申し訳ないが今は羽沢さんに頼らせてもらいます。

「次は生地を5cm位にしてもらえば大丈夫です！」

「5cm…？羽沢さん、ものさし持ってませんか？」

「え？ものさしですか？一応ありますけど…」

私は羽沢さんに手渡されたものさしを使って生地の長さを図る。

「これで5cmね…」

「さ、紗夜さん！絶対に5cmってわけじゃないですよっ!？」

「ですがかし…万一のこともあると思っただので…私がものさしさえ持つてきてれば羽沢さんの手を煩わせること無かったのに…迂闊でした」

「そんな敵キャラクターが決闘に負けた時みたいな感じで言われても…ははは」

滝川さんも苦笑いの中、お菓子作りは終盤を迎えた。クッキー生地を型でくり抜いて



から、教わった通りにアイシングして行きクッキーをオーブンに入れてあとは焼き上がりを待つばかり。

「ふう…クッキー作りがこんなに大変だとは思いませんでした」

マカロンは自分で作れるようになったし、和都からはレモンの蜂蜜付けを教わり、羽沢さんや滝川さん達からはクッキーの作り方を教わった。最初はこういう事には興味が無くて、ギターを練習するばかりの毎日だったのだけどこいざ作ってみるとここまで自分がお菓子作りにのめり込めるのだと知ることが出来た。

「でも紗夜さん、ちゃんと作れてたのでよかったですよ…も、ものさしっ…ぷふっ」

「なんで笑うんですか滝川さんっ!」

「そ、そうだよ雄天くん…紗夜さんに失礼…っふふ」

「羽沢さんまで!」

なんで2人が笑いを堪えてるのが分からないままだったが無事にクッキーは焼きあがった。滝川さんと羽沢さんは教える立場もあり、とても美味しそうに焼きあがっていた。私は自分の作ったクッキーをオーブンから取り出す。

「おお…」

見てみると初めてにしては上出来ではないかと思わんばかりの出来上がりだった。

しかし問題は味です味。見た目が良くても問題はそこなんですから。そんな時滝川さんが私に声をかける。

「紗夜さん、もし味が気になるって言うなら一つだけなら味見してみても構いませんよ？」

「ありがとうございます。では…」

自分の作ったクツキーを小さく割って口内にいれる。しつとりとした舌触りが口の中を巡っていき最後まで味わえる、そんな味だった。

「お、美味しい…」

初めてでここまで出来るなんて…滝川さんと羽沢さんには感謝しないといけませんね。それに…今後クツキーとかを1人で作って和都に食べさせる機会があれば食べさせることも出来るし褒めてもらえるかもしれないね。思わず褒めてもらえる所まで妄想に浸ってしまったが最後の仕上げも無事に終わり見事、クツキーが完成した。

「羽沢さん、滝川さん、今日は本当にありがとうございます」

お菓子作り教室が終わり、私は2人に頭を下げる。

「そ、そんな頭を下げられる程のことなんてしてませんよっ！」

「僕とつぐみはただアドバイスとかしただけですよ、最後は紗夜さんがちゃんとしてたじゃないですか」

「いえ、完成まで辿り着けたのはお二人のおかげです」

私は頭をもう一度下げ、帰ろうとする羽沢さんが駆け寄ってくる。

「あ、あの紗夜さん！もし良かったらLINE交換しませんか？」

「え？」

「え、えつと…お菓子作りの事でもし分からないことあつたら聞けますし…私個人では紗夜さんとお話したいなーって思ってた…ダメです、か？」

断る理由も無いので私は自分のLINEに羽沢さんを登録して、作ったクッキーの包をもつて、羽沢珈琲店を出た。帰る途中に日菜と今井さんと偶然にもすれ違い今日のこ話を話したりした。日菜が目を光らせてクッキーを食べたがっていたし今井さんには「今度アタシと一緒にお菓子作ってみない？それで友希那たちに差し入れしたりさー…」

と誘われたから時間の空いてる日にでも、と一言言った。改めて思うと今日はとても充実した1日を過ごせたなと私は思った。

和都 side

「ふう…やーつと終わった。バ薰の野郎、今度変なサプライズでもしたらまた千聖さん

にシめてもらおうとするか」

演劇部の部活のイベントを漸く終えた俺はペットボトルの飲み物を飲みながら帰路を歩いて行く。帰ったら燐子さんとあこ達とNFOするかな、そう思っていると後ろから声をかけられた。

「あなたが、華宮和都ですね？」

「あ？」

振り向くとそこに居たのは長髪で猫耳のついたヘッドホンを付けて、制服の上着に手を突っ込み自信に溢れた表情で俺を見ている女子がいた。やたら身長低くね？と思うが口には出さないのでおいた。言ったらどっつかれそうだしな、うん。

「そうだけど？つーか誰だお前は？」

「ふふ、これは失礼しました。わたくし、プロデューサーのチュチュと申します」

チュチュと名乗ったその女は、そのまま俺に歩み寄って来た。

「単刀直入に言います。華宮和都、貴方のその才能と力を私の為に使ってみない？」

## Episode 04 プロデューサー・チュチュ

## 和都side

「単刀直入に言います。華宮和都、貴方のその才能を私の為に使ってみない？」

チュチュと名乗る女の突然の提案に俺は口を開く。

「はあ？何言ってるんだ？俺の才能？そもそもどこで俺を知った？何故俺を知ってる？」

「Sorry、質問が多いわよ？ひとつにしなさい」

「そうか。じゃあまず聞かせる？どこで俺を知ったんだ？」

「Yes!ではそこからお話しましょう！」

チュチュは腕を組み、見下ろす様な態度で話し出す。

「華宮コーポレーションを知ったのは私がこの計画を立ててから間もない頃です。貴方のお父様、華宮ラセツが経営なさってる会社のHPを見かけましてね…」

〜1週間前〜

チユチユ side

『華宮コーポレーション：？確かこの街の超大手の大企業だったわね』

最強の音楽を作り、ガールズバンド時代を終わらせ革命を起こす。そう決めた私はパソコンに向かって調べ物をしていた時、偶然その広告をみかけた。

『華宮ラセツ：へええ』

載っている記事には会社と繋がってる企業や組織、プロデュースした数々の飲食店、私の狙っている音楽関連の事までもがこれでもかと言いくらいだった。目が口付けになったわ、これが人生を謳歌し人の上に立ち、数多数々を成功させてきた者なのね!?

『Wow::Excellent!!beautiful!!どれもこれも素晴らしいものばかりだわ!』

華宮コーポレーションの記事やなんやらを見ていた私はまたある記事に目が行く。

それは華宮ラセツのインタビュー記事だ。

華宮ラセツ 『会社の運営は総裁としても大変です。しかし努力と、それを目指し進んでいくという志さえあれば人は必ず人生の中で自分の価値観や大切なものに築けるのだと思います。昔から息子にも言っているんです、努力は決して人を裏切らないという事をね。それもあってか息子はとても遅く育ち今も高校で青春してるでしょう！いやあ！親としても鼻が高いですなあ！なっはっはっはー！』

この記事を見て私はある事を思いついた。そう、華宮ラセツの息子に接近し、私の計画を話した上で協力してもらおう事を。

『ふふふ…待ってなさい華宮ラセツの息子！』

それから私は華宮ラセツの息子のことについてネットで調べたりした。さすがに住所までわからなかったがどこの高校に通ってるかまでは分かったわ。

『華宮和都（はなみや わと）：羽丘の2年生なのね』

私は華宮和都の通っている羽丘学園に乗り込もうとした。が、不方侵入して捕まって没シユートされる訳にも行かないし放課後の時間になるまで待つしかなかった。校門前で待てば当然怪しまれるから待ち伏せは別の場所にしたけどね。

（……）なら分らないはず…。さあ来なさい華宮和都！

そうして待つこと数十分、校門から生徒が沢山出てくるが華宮和都らしき人物が出て

来る気配が一向にない。諦めないで待つこと数分、それらしき人物が校門を出て止まり、スマホを見始めた。

（んん？あの緑色の髪の男子生徒：彼が華宮和都かしら？と、とにかくアポ取らないとっ！）

『和都、燐子が来るまでの間、スタジオ練習を手伝って欲しいのだけど：キーボードの合わせをしたいの。生徒会で15分程遅れるらしいわ』

その時隣に女子生徒がやってきた。しかもその男子に『和都』と言っていたから彼が確実に華宮和都だということは分かった。それだけではない、よく見たらその女はガールズバンド時代を担うとも言われるバンド『Roselia』のボーカル湊友希那だった。

（ええっ!?なんで!?なんでRoseliaの湊友希那が!?）

でもこれはまたとないチャンスだったわ。華宮和都だけでなくRoseliaの湊友希那にも私の計画に引き込むチャンスが舞い降りたのだから。

『まーた合わせか?』

『当然よ。ライブまで時間が無いの。今度あるライブハウスdUbのライブに向けて完璧にしておきたいの』

『わーったから。燐子さん来るまでだぞ?そーいやリサは?』



(何を話してるか分からないわ…一体何を話しているの!?でも今しかない!)

私は隠れている所から出ていこうとするが、それを遮るかのようにもう1人が華宮和都と湊友希那に割って入ってきた。

『ワトー、友希那〜! やっほ〜☆』

『おうわビックリした!』

『リサ、ビックリさせないでくれるかしら?』

『あはは、ごめんごめん♪ちよつと驚かしたくて☆』

(うそ?! Roseliaの今井リサまで!?)

本来ならここで華宮和都にアポを取って協力を要請したかったが予想外のことがありすぎて結局アポを忘れてしまった…。3人がいなくなつてから私は隠れていた所から出て行きアジト基い家に帰ったわ。

『悔しい! それ以上に華宮和都がRoseliaと知り合いだったなんて驚愕だわ! いいや! この位で諦める訳には行かないわ! ぜーったいに成功させてやるんだから! 待つてなさい華宮和都! そしてRoseliaああ!!』

—————

「…と、言うわけで私は貴方を知ったわけ。OK?」

チュチュの話聞き終えてあらかた理解した。つまり自分の音楽の為に協力してくれ、ってことだろう。

「まあだいたい分かった。ウチの会社の一部は確かに音楽プロデュースもやってるしな。俺も一通り楽器は演奏できる」

「だったら…!」

「けど、今ここで決断をする訳にはいかねえな」

俺の発言にチュチュは眉を顰める。

「ほ、Why?なんで?貴方の才能を埋もれさせるなんて勿体ないわよ!!」

「俺はバンドはやらねえ」

「だったらなぜRoseliaの湊友希那と一緒に居るのよ!理解できないわ!バンドとかをやつてないのに関わるなんて変よ!」

「あ?それはあいつらの音合わせとかに付き合ってるだけだからなあ。それに友希那とリサは歳が1つ上だけど幼馴染なんだよ。助けになるなら音合わせくらいやる、どこにも変なところはないだろ?」

「ぐぬぬう…」

チュチュは後退りながらも必死に俺に協力をして欲しそうにする。そこで俺は氣に

なったことをチュチュに聞いてみることにした。

「おい、もし俺が仮にお前に協力をするってなったとしてもその後はどうするんだ？」

「よくぞ聞いてくれましたね！」

待ってたぞと言わんばりにチュチュの顔が明るくなる。

「貴方を私のプロデューサーで最強のミュージシャンにする！それと同時にRoseliaをスカウトするわ！私の音楽を奏れば最強になれる！演出、パフォーマンスだけでなくライブ会場から物販まで全て私が用意するわ！これほど互いが得する美味しい話はないと思うの！」

チュチュは自分の野望の為に俺をスカウトするだけだと思っていたがまさか友希那達まで手を出すとは想像してなかった。あいつらは、紗夜達は自分たちの音楽で頂点をつかむって言っていた。自身の野望の為とはいえRoseliaの、紗夜達の夢をこんな形で終わらせる訳には行かない。そして俺もチュチュの、こいつの下に成り下がる訳には行かない。そう思った俺は口を開く。

「チュチュって言ったな。ありがたい話だが俺はRoseliaの、友希那達の夢を応援するって決めたんだ。丁重に断らせてもらおう」

じゃあな、と一言言っただけ立ち去ろうとするが向こうはそれでも尚、諦めていなかった。

「Why?なんでどうして?貴方の才能が勿体ないわ！」

「自分の私利私欲の為に誰かに成り下がる程俺も頭が悪くないからな」

俺はチュチュが掴んでいた袖を振りほどき、背を向けてそのまま歩いて行った。

チュチュ u s i d e

「……………」

華宮和都が立ち去ってから私はその場に数分立ち尽くす。そして近くに置いてあるゴミ箱に向かって怒りをぶち負かすように強烈な蹴りを噛ます。ドガツと音を立てゴミ箱が倒れ、ガサガサと中身が崩れ落ちる。

「んぎぎい…なんでなんでよ！信じられないわ!!こんなオイシイ誘いを断るだけじゃなく私のことを『私利私欲』ですってえ!?何も知らない癖にいいいい!!華宮和都めえええ!」

アイツだけは許さない…絶対に許さない!私は蹴ったゴミ箱とその中身を元の場所に戻す。

「…そう言えばアイツと湊友希那は幼馴染だつて言つてたわねえ。しかも今度、dubでLIVEもある…」

なら…私のやることは1つ。今度のRoseliaのLIVEでRoseliaを

プロデューサーする、そして私の最強のバンドにする！更に華宮和都をぶっ潰してやる！徹底的に叩きのめせば自分の愚かさつてものを身に染みるほどわかるでしょう。それで改めて私の手中に収める。

「ふふふふ、待つてなさい華宮和都：Roselliaアアア！」

和都 side

く華宮邸 和都の部屋く

帰ってきて早々、愚痴を漏らしながら俺はネットゲに勤しむ。もちろん、あこと燐子さんと一緒にボイスチャットしながらやっている。

和都 『くそ：なんだったんだあのガキ：』

あこ 『和都先輩どうかしましたかー？』

和都 『ああいや、さつきちよつと変なやつに絡まれたんだよ』

あこ 『変なやつつてどんな人ですか？』

和都 『なんか俺の事をスカウトして最強のミュージシャンにしてやる！つてふざけたことを抜かしてんだよ：おつととやべ、MP回復ポーション使わねーと』

燐子『す、スカウト…ですか？それって、芸能プロダクションとか…そういう類だったりしませんか（・ω・）？』

あこ『ええーっ!? 芸能プロダクションからのスカウトおーっ!?』

和都『いやいやちげーよ。自称プロ音楽プロデューサーで俺らより年下』

燐子『年下でプロの音楽プロデューサー…ですか（。ム）ビツクリ』

和都『そうなんですよ。しかもやたら態度が気に食わないし私利私欲だったから断ったんです。あ、そろそろ倒せそうですよー』

燐子『そ…そうですね。これで…クエストクリアです（?▽、?）』

あこ『やったー倒せたー！ありがとりんりん！和都先輩ー！じゃあそろそろ遅いからあこ落ちまーす！お疲れ様でしたー！』

燐子『うん…おつかれあこちゃん（??? ☒ | ☒ ??）じゃあ華宮くん、わたしも

落ちるので失礼します…』

和都『ふーい。お疲れ様でーっす』

ボイスチャットが終わり、ゲームのセーブを確認した俺は疲れた身体を養うためにすぐさまベッドにダイブする。

「あー疲れた…とりあえずもう寝よう…」

疲れが溜まっていたから俺は2分と待たずにすぐ眠りについた。

## Episode 05 にゃんにゃんな休日

♪ 湊家 友希那の部屋 ♪

友希那 side

「ふう…まだ、かかりそうね」

Roseliaでの練習が無いから今度のLIVEに向けての新曲を作ってはいるものの…全然イメージが湧いてこない。CircleもGalaxyも空いてなかったのにはびつくりしたわ。

「ライブまであまり時間が無いわ…早くRoseliaに相応しい、最高の曲を作らないと…」

飴玉がたくさん入った袋から飴をひとつ取り、口に放り込む。舌で飴を舐めながらヘッドホンを手に取り、もう一度作業に戻ろうとすると部屋のドアをノックする音が聞こえた。私はヘッドホンを首にかけて机から立ち、部屋のドアを開けるとお父さんが立っていた。

「友希那、今時間あるか？」

「お父さん？どうしたの？」

「いや、ここ最近ずっと休みの日は部屋にいてばかりだから少し外でリラックスしてきたらどうか、と思つて声をかけたんだ。みたところ…難航してるみたいだから」

苦い表情になつてるお父さんが見つめるその先はパートごと仕分けられた楽譜と譜面、鉛玉を開けた袋が散乱している机だった。

「うっ。確かに難航してるけどライブが近いから一分一秒無駄にすることは…」

「だからこそリラックスが必要なのは…友希那も分からないわけじゃないだろ？」

「そうだけど…」

父さんはニコツと笑うと私の肩を掴む。

「うん、分かつてるなら大丈夫。友希那なら最高の曲を作れるさ」

お父さんはそう言うのとドアを閉めて行つた。私は机に向かい、作曲に戻ろうとした。が、折角お父さんがリラックスを促してくれたわけなのだし、もしかしたら良いフレーズも思いつくかもしれない。そう思ったのかハンガーにかけてあつたカーディガンを羽織り、財布などを持って玄関を出た。

(さて…外に出たのはいいのだけど、どこに行こうかしら…)

そう思いながら歩きを進めていると、いつの間にか公園まで来てしまつていた。私は



一人ベンチに座り、雲ひとつない青空を見上げる。

「今日はいいい天気ね…」

日差しが丁度いい温度でもおわず眠くなってしまいそうだわ…ふああと小さく欠伸をしてウトウトしていると聞き慣れた動物の鳴き声が聞こえてきた。

「ミャー」

「!?!」

ふと、座っている横に目を向けるとそこに居たのは耳が垂れた灰色の猫だった。あまりにも眠そうにしていたのか私が目を合わせると小さく欠伸をした。

「ひゃっ…か、かわいい…」

私は公園に誰もいないことを確認して、そつとその猫の頭を撫でる。柔らかく暖かい猫毛は日差しを受けて極上の肌触りで病みつきになってしまう。

「みやああ〜」

「ふふ…にゃーんちゃーん。ふふっ、可愛いねー」

「にゃむう…にゃああ」

猫の顎を指で擦るように触ると擦りたいのか甘い声を出す。

「これが好きなのね?」

「みやああ…♪」

こういった日も悪くないわね……。そう思いながら一匹の猫と戯れること数分、満足いくまでリラックスした私は猫を膝上からゆっくり離して地面に置く。

「じゃあ、私はそろそろ行くわね」

最後に猫の頭をゆっくり撫でて、その場を立ち去ろうとした。その時、

「みやあ〜?」

私が帰ろうとすると、どこに行くの? もうちよつとだけ撫でて欲しいの、と言わんばりに私のことを見つめてきた。正直言うともう少しだけ撫でたいし愛でたいがフレーズやら諸々考えないといけない。

「ごめんなさい、そろそろ家に帰ってやらなきゃいけない事があるの。また公園に来たら撫でてあげるから…ね?」

「にやう…?」

私はそう言つて公園を後にした。曲作りに難航してなければもつと可愛がつてあげれたかしら…:そんなことを考えながら玄関の扉を開ける。

「ただいま」

「おかえり友希那。リラックスは出来たか…:つて、後ろの猫はどうしたんだ? 拾つてきたのか?」

「え? 後ろ…?」

ふと私が振り向くとそこに居たのはさつき公園で戯れた垂れ耳猫だった。

「にゃああ〜」

「あなた…もしかして公園からついてきたの？」

「んにゃ〜」

私の脚に頬ずりしながら鳴く仕草に思わずキュンとしてしまう。ひよいと持ち上げてみると嬉しかったのか手足を軽くばたつかせていた。

「ふふ…可愛い。つて、あら？」

「どうした友希那？」

「よく見たらこの子…首輪付けてた痕があるわ」

「付けてた痕って、もしかして捨てられてたってことなのか？」

もしそうだとしたら…私はそれを確かめる為にさつきの公園まで走って戻る。草むらや木の根元ら辺でガサガサしていると予想通りだったのか、猫が入っていたと思われるダンボール箱があった。覗くとそこには空になった猫用の餌、魚の缶詰が散乱し、抜け落ちた数本の猫毛もあり相当汚くなっていた。

「やつぱり…あなた、捨てられたのね？」

「んにゃあ〜」

「……………」

私は家に戻り、この事をお父さんに話した。

「そうか…ありがとう友希那」

「ね、ねえお父さん…」

「どうした友希那？」

「この猫…家で飼うこと出来ないかしら？」

私の言葉にお父さんは目を丸くした。

「小さい頃は飼っていたが…大丈夫なのか？」

「私が責任もって世話するわ、この子を放っておけないの」

「…そうか。分かった、お母さんには僕から伝えておくよ、しつかり面倒みるんだぞ」

あまりにも、あっさり許諾してくれてちよつと驚いたがまた猫を飼えるということにちよつとほくそ笑みながら私は部屋に戻った。ベットにダイブして猫の形をした枕に頭をぼふぼふする。

「ふう…飼える嬉しさに変な声が出そうになったわ」

「みやあ〜？」

「あら、あなたついてきたのね？」

どうしたのかというように擦り寄ってきたので、私は頭を撫でて心配を和らげようとする。

「大丈夫、今日から私達が新しい飼い主よ。前の主人がどうであれあなたを捨てるなんてことはしないから安心して」

「んにゃにゃー」

「さて…あなたの名前を決めなきゃいけないわね」

どんな名前がいいかしら？ミケ…タマ…マカロン…すあま？

「安直すぎるわね…」

机に散乱していた Rose lia の楽譜をまとめて棚に置きながらぴつたりの名前を考える為にもう一度猫を見てみる。

「にゃーあ？」

「どんな名前がいいかしら…」

灰色で…垂れ耳で…細めだから眠たそうにしてるわね。それから何個か名前候補を考えるけど良いのが思い浮かばない。どんな名前がいいか考えてると、猫が私の髪飾りが気になったのか触りたそうに手を伸ばしている。

「どうしたの？これ…気になるの？」

「みやおお」

私は蝶の髪飾りを外して猫に持たせると肉球でぺちぺちしたり、柔らかな毛で頬ずりしだす。

「私の髪飾り、そんなに好きかしら？可愛いわね…」

それを見てると、ふと名前が思い浮かんだ。

(蝶…アゲハ蝶、アゲハは英語で *swallowtail*…スワロウテイル…テイル！  
なんでどうかしら)

「…テイル」

「にゃ？」

「あなたの名前は、テイルよ。髪飾りを気に入ってたし…どうかしら？」

テイルと呼ばれた猫は気に入ったのか嬉しそうに、「うにゃあ」と鳴き、膝にすり寄ってきた。

「ふふ…気に入ってくれたのかしら？これからよろしく、テイル」

「にゃあ♪」

こうして、私達の家に新しい家族が、灰色垂れ耳猫のテイルが仲間になりました。

↳ 数日後↳

テイルを飼飼い始めてから数日経ったある日、私達 *Roselia* は *Galaxy* で

ライブの練習をしていた。新曲だからある程度進行が遅くなる、なんてことは無く R O s e l i a のメンバーはすぐにテンポを掴み自分のものにしていった。

「ふう…そろそろ時間ね」

「んんっ、おつかれ☆クツキー作ってきたけど食べる〜?」

「リサ姉のクツキー食べたーい!」

「今井さん…ありがとうございます…」

「はい、友希那」

「ありがとうリサ。じゃあ、私はそろそろ帰るわね」

私は荷物をまとめてスタジオから出ようとする。紗夜が不思議に思ったのか私を引き止める。

「湊さん、ちょっといいですか?」

「?どうしたの紗夜?」

「いえ、ちょっと気になったんです。最近練習終わってから帰るのがいつもより早くなって思ったんです」

「そ、そうかしら?」

紗夜は私の目をじっと見つめてくる。紗夜が眉を顰めて見つめること数分…

「いえ、私が考えすぎてるだけかもしれないね。すいません」

勘違いだったのかと思ったのか紗夜はそう言つてギターを背負い、練習スタジオから出て行つた。一息ついてんたしもスタジオから出ようとすする。

「友希那ー!」

今度はリサから声をかけられる。

「どうしたのリサ?」

「いやさ、ワトから聞いたんだけど学校帰りに友希那がホームセンターから出てきた所を見たつて聞いたんだけど…」

「え? 私がホームセンターから? み、見間違いないかしら?」

私はそそくさとスタジオから出ていき、まっすぐ家まで向かつて行つた。家に戻つてからは部屋に向かい、テイルを呼ぶ。

「テイル、ご飯よ」

「んにゃっ」

テイルは掛けられてる学生カバンの中からひよっこりと顔を出すと、そのまま勢いよく飛び出す。私は買い置きしてある猫缶を取り出し、缶を開けて床に置くと美味しそうに食べ始める。なんで学生カバンの中にいたのかと言うとそこがお気に入りらしく、

「ふふふ、そんなにお腹減つてたの? 練習行く前にもご飯出しておいたのに…食いしん坊ね♪」



「んにゃあ♪むぐむぐ」

「よしよし…」

リサ side

〜今井家 リサの部屋〜

「やーっぱり友希那、何か隠してる気がするんだよなー。ワトはどう思う？」

『隠し事ねえ…どっかでまた野良猫にあげる餌でも買ってたんじゃね？ホームセンター行ってたし猫の餌買ってたってんなら合点いくだろう？』

「そうかな〜？」

アタシはワトと通話しながら最近の友希那のことについて話していた。

『あ、そういや紗夜から聞いたぞ。今度dubで新曲含めたライブするんだってな』

「紗夜から聞いてたの〜？」

『まあな。チケットも取り置きしてもらったから明日観に行くし』

「わ〜お♪これは紗夜も友希那も楽しみだろうな〜☆」

『友希那に新曲の事聞いたんだけど全然教えてくれなくて…どんな曲なのかちよつとだ』

け…な?』

「ダメダメ。ライブ来てからのお楽しみ」

『ちえく、いけずく』

「モカみたいに言ってもだーめ♪」

『へいへい、楽しみにしてますよーだ。んじやつ』

ワトはそう言つて電話を切つた。

「さくで、アタシもそろそろ寝ようつと☆」

ベッドに取り付けてあつた電気スタンドの電源を落とす、アタシはゆっくりと眠りに入つた。

# Episode 06 BRAVE JEWELとdubと

## チュチュ

チュチュside

「今日は華宮和都が言っていたRoseliaのライブの日ね…」

「私がこの日をどれだけ待ちわびたことか。……アイツ、華宮和都には分からないはず。あれ程の屈辱と侮蔑の嘲笑をされて誘いを断られ尚且つ私利私欲と謳われ黙ってられるはずもなかった。」

「くつくつく…それも今日で終わりだわ！あの一件は水に流して今度こそ計画を実行する！あーはっはっはっ！」

和都side

「今日のRoseliaのライブは16時から…か」

「紗夜から送られてきたLINOを確認して俺はベッドの上で仰向けになる。」

「ライブのチケットはリサが取り置きしてくれてるって言うてたからまあいいとして……暇だな」

演劇部は今日は休みだし紗夜達は今dubの方でずっと打ち合わせするからーってことで連絡するのは無理そうだし……

「やべえ、こんなに暇になったのいつぶりだよ」

やべーよ、作者が仕事疲れてこの小説書けなくてそのまま爆睡決めるくらいやべーよ。最近めっちゃスランプだからなあ……いけね、リアル事情はこれくらいにしとくか。仕方ないからNFOをやろうとすると、いきなりLIN〇の着信音が鳴った。紗夜か友希那達からかと思ったが以外にもそれは、同じ演劇部の麻弥さんからだった。

「麻弥さんから？えつと……機材運搬を手伝って欲しい？」

暇すぎて死にそうになっていた俺はベッドから飛び起きる。そして財布やらなんやら諸々の準備を調べ家を出た。

「羽丘の校門前にいるので来て貰えませんか……か。ちやちやつと終わらせるか」  
競輪選手並の速さで自転車を漕ぎながら俺は羽丘まで向かった。

↳羽丘学園 校門前↳

「うぼああ…何だこの量」

漕ぎ続けること数10分、羽丘の校門前に着いた俺はその機材の多さに圧巻していた。ベースアンプやスピーカー、ギターアンプは勿論のこと、他にもわんさかあって一筋縄では終われなさそうな量を見た俺はさっきの眩きを全力撤回したい。

「いやあすいません和都さん…これ今度の演劇で薫さんが使うって言ってたので今の内に運搬して置こうと思ひましてね…フヘヘ」

麻弥さんは申し訳なさそうに頭を下げる。事情はよく分かったが問題はもうひとつあった。

「別に麻弥さんが謝ることじゃないと思うけど…当の本人のバ薫はどこなんすか？呼んで手伝ってもらった方が…」

「それはジブンも考えたんです。それでさっき薫さんに電話したんですよ。そしたら、『申し訳ない、今ハロハピのメンバー全員で南の島にいるんだ。儂いバカンスなんだよ』って言われまして」

「あの野郎…」

ふつふつと怒りが込み上げてくるがここでキレようともバ薫にはなんにも影響しない。ここはあえてぐつと抑える。

「ま、まあ…でどうの言っても仕方ないので…運んじやいませうか」

「そうっすね」

バカンスから戻ってきたら千聖さんと一緒にかおちゃん呼びで攻めてやる…そんなアホみたいな野望を抱きつつ俺と麻弥さんは機材運搬を始めた。クソ暑い中機材を部屋に運び入れること一時間…

「ふう…やつと終わった…」

部屋に運び入れ、クーラーをつけて涼んでいると麻弥さんが冷え冷えの缶ジュースを俺の頬に当てる。

「いやあ、ありがとうございます和都さん」

「うわっふ!?!」

「あわわ!?!ビックリさせてすいません!」

「いや別にいいんすけど…」

俺は貰った缶ジュースを開けてぐいっと一気に飲む。

「ぶへえ…生き返ったあ…」

「ごくごく…んんっ、ふう…いやあ、ほんとにありがとうございます!」

「いや、紗夜たちのライブまで暇だったし問題ないですよ」

「あ、そう言えば湊さん達が言ってるのを見ましたよ。今日Roseliaのライブをdubでやるーって。ジブンは日菜さんと行く予定なんですよ」

麻弥さんが思い出したかのように話す。

「もうすぐ撮影が終わるからーって言っていましたのでそろそろ来る頃だと思うんですよ。本当はパスペレ全員で行けたらなーって思ったんですけど彩さんとイヴさんが雑誌の撮影とインタビュー、千聖さんが夏ドラマの撮影で折が合わなかったんです」

麻弥さんが言い終わると同時に廊下でドドドドと走ってくるような音が聞こえてきた。そして演劇部のドアを思いつきり開けて日菜さんが入ってくる。

「どーん！麻弥ちゃんお待たせー…ってあれ？和都くんもいるー？なんでなんでー？」

「うお、本当に来た…」

「あ、日菜さん。実はですね…」

なんで俺がいるのか不思議に思っている日菜さんに麻弥さんが説明する。

「……と、言うわけでして」

「なるほど♪和都くんもおねーちゃんのライブ観に行くことになってたんだ。まあそうだよね。おねーちゃんとお付き合ってるんだしく♪」

「ええっ!?!和都さん、紗夜さんとおおお付き合ってるんですかあっ!?!」

麻弥さんがあからさまに驚き後退りをした。しかも頬を赤く染めて初めて恋愛をした初々しいカップルみたいな感じになっていた。

「この前もおねーちゃんとお出かけしてたし？夏服買いに行ってたじゃん♪」

「なんで知ってんすか!? あんたまさかストーカーしてたワケ?!」

「ふっふっふ、日菜ちゃんをナメてはいけないよー! リサちゃんと変装してストリーキングしてただよー!」

「日菜さん…アイドルが堂々とストリーキング宣言しちゃアウトですよ? いや、この場合は日菜さんが紗夜さんの事が好きだからもう何とも言えませんが…ふへへ」

麻弥さんが苦笑いになりながらも汗をかいてる日菜さんにドリンクを渡す。それを貰うと日菜さんはグイッと一気に飲み干した。

「ぶっはっ!! 生き返ったあ〜! いや〜っし2人とも、おねーちゃんのライブ行くよ〜!!」

元氣を取り戻した日菜さんに手首を掴まれた俺と麻弥さんは涼しい部室から一転し、灼熱の領域へと連行される。

「ちよ、ちよつと待ってください日菜さ〜ん!」

「あつ…と、とりあえず紗夜達に連絡しとくか…」



くライブハウス dub 控え室く

「あら、和都からだわ」

ライブの準備を一通り終えた私達は控え室で休憩をしていた。今井さんが作ってきたクッキーを摘み、和都特製のハーブティーを飲んでしていると和都から L I N O が届く。

「ワトからー？ねえねえ紗夜、なんてきたの〜？」

今井さんがにやにやしながら私のスマホを覗きこもうとする。

「何に期待してるか分かりませんが普通の内容ですよ。えつと……ライブハウスに連行されてるなう？」

いつもの様に踵を返し、メールを読むが……連行？今井さんが言うには和都の分のチケットは取り置きしてあるし「今から行く」の一言で大丈夫なはずなのだけ……

「……まさかとは思うけど、いや、そんなわけはないわ」

私は和都に O I N E を送ってみる。内容は至ってシンプルに「まさか日菜がそこにいるの？」と送るとものの数秒で返信が返ってきた。返信には想像通りの言葉が添えられている。

「……全くあの子は何を考えてるのよ」

まさか日菜と一緒にいるなんて思わなかったわ。ライブの事は言っていなかったはず

なのにごどこから日菜に伝わったの…？

「多分ヒナの事だからパスパレの皆にでも聞いたんじゃない？ 彩とか麻弥辺りだとアタシは思うな〜♪」

「はあ…」

「ひ、氷川さん…何だか顔色悪いですけど大丈夫ですか…？」

「だ、大丈夫よ白金さん…」

ライブ終わって家に帰ったら説教しないといけないわ、私はそう決意した。その時、dubのスタッフが部屋の扉をノックして入ってきた。

「すみませんRosealiaのみなさん！最終チェック入りますけど全員いけますか？」

「ええ、わかったわ」

スタッフの言葉に湊さんはいつものように返答する。私達も楽器を持って最終チェックに向かった。

和都side

くライブハウスdubく

「とうちやーくっ!!」

日菜さんに連行されてきた俺と麻弥さんは汗をかき、息を切らしながらも漸く到着する。なんで俺ら連行した日菜さんは汗全然かいてないのか不思議に思うぞ今日この頃  
:

「あれー? 2人とも汗だくだー? どうしたの〜?」

8割、いや10割アంతタのせいだよ!! とは口が裂けても言えるわけなく、適当な愛想笑いでごまかす。

「日菜さんの体力すごいです…ふへ、ふへへ」

流石の麻弥さんも予想外だったのか苦笑いになる。はやく涼みたかった俺はささつとライブハウスに入る。入るとエアコンも効いていて外の猛暑が嘘みたいだった。さすが都内最大のライブハウスと言わんばりに扇風機やテレビ、自販機や音楽雑誌、パンフレットも置いてある。紗夜達がライブするからなのか奥の方では物販店らしきものも開催されていた。

「ア、ア、ア、ア、ア…涼しい生き返るう…」

「そうですね。ジブン、このまま涼んでいたいですよ」

「そういう訳にはいきませんよ、俺ら紗夜達のライブ観に来たんですから」

「ですよね〜」

「うわあ…和都くんも麻弥ちゃんもふにや〜ってしてる。おねーちゃんのライブチケット取れなくなっちゃうよ〜?」

日菜さんが俺と麻弥さんを覗き込む。

「あー、その辺の事は大丈夫ですよ。俺の分はリサが取り置きしてくれてるんで…」

「ぶ〜ぶ〜!和都くんずるいよー!」

「ずるくないです」

「あはは…日菜さん、和都さんもその辺にして…取り敢えずジブんと日菜さんの分、チケット買ってきますので。和都さんは先に行つて貰えると助かります」

「りよーかいでーす」

俺は受付まで行き、俺の名前で取り置きしてあるチケットを受け取り、席に座つて麻弥さんたちが来るのを待つ。待つまでの間、持ってきたペンライト（紗夜のイメージカラーのやつ）を取り出して腰にセットしたり、dubのライブハウス内の決まり事のようなものが記された資料を読み漁る。

「さてさて…始まるまで暇だな。にしても流石Roseliaの人気ハンパねーな…」

プロ顔負けの本格ガールズバンドRoselia、その人気はBLACKSHOUTをリリースした当時からずっとうなぎ登りだ。孤高の歌姫と呼ばれていた友希那がバ

ンドを組んだってのが話題になってたからなあ…

「そろそろ麻弥さんと日菜さん来る頃だろうな…」

「おっ待たせ和都くん！」

「お待たせしました」

ちょうどよく日菜さんと麻弥さんが到着して俺の隣に座る。日菜さんの手には俺と同じ紗夜のイメージカラーのペンライトが握られていた。

「早くおねーちゃん来ないかなー♪」

「そんな急かさなくても紗夜は逃げたりしないと思いたい」

「そこは逃げないって言って和都くん！」

「お2人共、そろそろ始まりますよー？」

麻弥さんがそう言うのとライブハウス内が一瞬暗くなる。そして再び明かりが灯されるとステージに友希那達が立っていた。それを目の当たりにしたファンのやつらは大歓声をあげる。もちろん日菜さんも…

「おねーちゃん!!おねーちゃんおねーちゃん!!」

この通り、紗夜を見て大歓喜していた。

『Roseliaです。みんな、今日はdubまで足を運んでくれてありがとう』

友希那がスタンドマイクから音声を通す。それだけで更に歓声があがる。

『みんな…Rose liaに全てを賭ける覚悟はあるかしら？早速新曲、行くわよ！BRAVE JEWEL!!』

これが昨日リサと話していた新曲か…Aメロを聴いただけで分かる力強さと繊細さ、そしてリズムも完璧だ。そして友希那の圧倒的な声量と歌詞のフレーズ一つ一つがライブハウスを包み込む。俺や麻弥さんが圧倒されながら魅入っていると横では、

「おねーちゃん!!めっちゃかっこいいよー！大好きだよー！」

息を荒くしながらペンライトを他の客と同じように振りまくり、どさくさ紛れに愛の告白までしていたが当然紗夜は集中していた為、顔色ひとつ変えていない。因みに日菜さんの興奮のボルテージは家に帰ってから収まらなかったと後日疲れきった紗夜から聞くことになるのは今の俺はまだ知る由もないのだ。

この後BLACKSHOUTとLOUDERや、カバー楽曲のオンパレード、RE:birth dy等も披露しライブは終わった。ライブが終わり麻弥さんは興奮しまくった日菜さんを連れて一旦事務所に向かった。ちよつと打ち合わせ入ったので失礼します、との事だ。俺も帰ろうとしたが、紗夜からLIEが来た。

「あり？紗夜からだ」

なんだと思い見てみると画像が添付されていた。開くとそこには友希那以外が死屍累々と控え室でぐったりとしていてヘルプと一言記されていた。スタッフの人に事情

を話して控え室の扉を開けるとクタクタになった紗夜が俺を見るなりフラァーっとしながら抱きついてきた。

「わとお…つかれましたあ…」

「おうっふ…いきなり抱きついてくるなって紗夜…」

「だって疲れたんですもん…少しくらい優しくしてくださいい…」

「つたく…じゃーねーなあ…」

「ワト…」

今度はソファでぐったりしているリサが俺を呼ぶ。紗夜に抱きつかれながらもリサの所に行く。

「なんでお前まで瀕死寸前なんだよ…まああれだけやりやあそうなるよな…」

「あ、あはは…ちよつと飲み物買ってきて欲しいんだけど…」

「お、お願いします華宮くん…」

「ぐふう…お願いしますう」

リサの手にはメンバー5人分のお金、飲料が5本買えるほどのお金が握られていた。一旦紗夜を引き離し、リサからお金を受け取った俺は外の自販機に向かう。そこには風邪を浴びて涼んでいる友希那がいた。

「あら和都、どうしたの？」

「お前こそこんな所で何してんだよ」

「見ての通り、みんなが来るまで外の風邪を浴びて涼んでいたのよ」

荷物を持ちながら平然と言う友希那だが全く疲れてない、とは言えないだろう。俺は自販機で5人分の飲み物を買ひ、1本を友希那に渡す。

「あら、私にくれるの？」

「この5本はリサの金だ。後でリサにお礼でも言っとくんだな」

俺は残りの4本を紗夜達に渡して控え室に戻った。飲み物を受け取ると紗夜もリサも燐子さんもあこも喉をぐくぐく鳴らして飲んでいく。

「ぶっはあ！生き返ったあー！華宮先輩ありがとうございますー！」

「ふう…死ぬかと、思った…どうも…華宮くん…」

「燐子さんもあこも例ならリサに言ってください」

リサと紗夜も元気を取り戻したのか楽器を背負って帰る支度を始める。俺はそれを見送り控え室を後にし、dubを出す。

「さーて俺も帰るk…」

「Why!? どうしてなのっ!？」

突然、聞き覚えのある声が聞こえた。声のした方に行ってみるとそこには友希那と猫耳ヘッドフォンを付けたチュチュが対峙していた。俺は2人に見つからないように



こっそり聞き耳を立てることにする。

友希那 side

「何故? どうして? Roselia が私の音楽を奏できれば最強最高のバンドになれる!!」

「…悪いけど Roselia にプロデューサーは必要ないわ。私達は私達の音楽で頂点を目指してるの。ごっこ遊びならアイオスでもスクフオスでもやってればいいわ」

「ご、ごっこ遊びじゃないわ! 私は真剣なの!! ってかその2つ名前に大丈夫なの!? アウトにならないの!?!」

和都が居なくなった直後、目の前に現れた猫耳ヘッドフォンの子が来た。話を聞く限りだと音楽プロデューサーをやっていて、名前はチュチュと言うらしい。その中で私達 Roselia を是非ともプロデュースさせて欲しいと頼み込んで来たのだけれど…

「あれほどの Perfect sound!! ギターやベースの Technique!! ドラムとキーボードの織り成す Harmony!! そこにこの私のプロデュース力とデータ、私の創る曲が加われば何者にも勝る最強のバンドになれる!! 勿体ないわよ…貴女達の才能を私なら完璧に活かせる! だ、だから…」

「友希那お待たせーって…どうしたの？」

後ろの勝手口からリサ達が出てくる。

「あれ？もしかして友希那取り込み中だったり？アタシら1回退いところか？」

「大丈夫、なんでもないわりサ。話は終わってるから行きましょう」

「ちよ…待ちなさい湊友希那っ!!」

行こうとすると、再び呼び止められ何かを渡された。渡されたものを見てみると猫の形をしたUSBメモリだった。

「私の最強の音楽…聴けば分かる!!」

私はため息混じりに言い放つ。

「…何度言っても、例えこの曲を聴いたとしても結果も答えも変わらないわよ？」  
私達はその子を後にして立ち去った。

和都 side

n  
チュチュがどうやら断られたらしい。まあ当然の結果だよな…さて俺は撤収するか

「和都、そこで何をしてるの？」

「おうわっ!？」

声を掛けられ振り向くと友希那達が居た。俺は盗み聞きしてたことを正直に話す。隠すのはなーんか性にあわないからな。はぐらかしても逆に紗夜に問い詰められたらどの道はいちやうだろうし。

「聞いてたのね…盗み聞きなんて褒められたことじゃないわよ」

「帰ろうとしたら聞こえたんだよ猫バカ」

「ね、猫バカですって…?」

「ほーら、友希那もワトも睨まないの!ね?早く帰ろ?アタシもうクタクタだよ?」

「私も帰って今日は休みを取りたいです」

「紗夜がそう言うなら…」

仕方無くやめて俺達は帰路を歩いて帰って行った。

チュチュside

「ううう…なんでなんで信じられない!!」

私は近くにあったゴミ箱をドガツと思いつき蹴り上げると中のゴミがガサガサと散布する。

「はあはあ……きいいい！」

華宮和都と言いい友希那と言いいこの私の誘いを断るなんてええ〜っ!!私を誰だと思ってるのよっ!!?

「ぐぬぬ……」

散らかったゴミを集め、ゴミ箱を元の場所に戻す。

「……ぶっ潰してやる。華宮和都も友希那もRose l i aも!!私の音楽が凄いつてことを証明してやる!!ゼーんぶ〜ぶっ潰してやる!!」

紗夜 s i d e

く氷川家 紗夜の部屋く

『うおーい紗夜、起きてるか?』

「起きてますよ。さっきお風呂から上がった部屋に戻って来たばかりなので」

お風呂から上がった私は和都と通話をしている。

「今日のライブ来てくれてありがとうございます」

『行くに決まってるんだろ? ってか新曲の時の紗夜めっちゃカッコよかったぞ?』

「ふふ…ありがとう。かっこいいなんてあまり言われたことないからちよつと照れくさいわね…」

『じゃあ可愛いって言った方が良かったか?』

「そ、それは…2人で居る時だけです。私の前でしか言っちゃダメです／＼／＼／＼」

『お、おい…恥ずいこと言うなよ…』

「和都が言ったからでしょう…」

『……／＼／＼／＼』

「……／＼／＼／＼」

互いに恥ずかしくなったのか無言が続く。

『そつ！そうだ紗夜！今度の日曜日空いてるか?』

いきなりの話題に困惑しながらも予定を確認する。

「え?あ、空いてるけど…どうしたの?」

『いやあ、えつと…学年上がってから2人で出掛ける機会って中々なかったじゃん!』

「え、ええ…」

『だからさ!この機会にどっか涼しいところ行かねっ?!今日のライブ頑張ったご褒美みたいな!』

「ご褒美かどうかは置いとくけど…そうね、確かに涼しい所に行きたいわね」

『よーっし決まりだな！ちゃんと予定空けとけよー！それと今日はゆっくり身体休めろよー！』

和都はそう言つて電話を切つた。私は携帯を置いてベッドに座り、クッションをぎゅつと抱きしめる。

「…久しぶりの和都とのデート…ふふ♪」

変にニヤけるのをぐつと堪える。涼しい所…溪流とか川のある場所とかに行くんですかね？もし水に入るとかになつた時もだし個人的には和都に見てもらいたいつてもあるわ…

（だとしたら、恥ずかしいけど…み、水着を買いに行つた方がいいかしら…？）  
そんな事を思つてると私は疲れからかそのまま眠ってしまった。